野まさ

[illegible] 并六

詞を名らをわ

[V. 28?]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 28
copy 1
Asian
Japan
Case

LIBRARY OF CONGRESS

2004557302

33

源氏廿六才の八月のこと

中宮のおまへに秋の花をうへさせ給へることつね　秋好ノ六条院にさす

のとしよりもみ所おほく色草をつくしてよしある

くろぎあかぎのませをゆひまぜつゝおなじき花の

えだざしすがた朝夕露のひかりもよのつね

ならず玉かとかゞやきてつくりわたせる野べの色を

みるにはた春の山もわすられてすゞしうおもしろく

こゝろもあくがるゝやうなり春秋のあらそひに

むかしより秋に心よする人はかずまさりけるをな

たゝる春のおまへの花ぞのに心よせし人〴〵また

ひきかへしうつろふけしき世の有さまに似たり

秋好ノ
これを御らんじつきてさとゐしたまふほど御あそび

あそびなどもあらまほしけれど八月（秋好又ニ）は故前坊（せんぞう）の
は忌（ゆき）月なれば心もとなくおぼしつゝあけくるゝに
この菊の色まさりうしきどもをはらんずるに壁分（のつき）
例（まい）のとしよりもおどろくしく元の文かたりて
ふきいづ菊どものしほるゝをいとさしもおもひ
しまぬ人ごとにあれけりなと思ひたるゝをまして
草むらの露の玉の袋ひぐるゝまゝに（秋好ノ）はいろ
まどひもしぬべくおぼしたり おほふぢりの袖を
あきの元にしもそほしげなりけれ これもまゝに
抱もしらず吹まよはして いとむくつゆければ みゝ
うしなど乗りぬるに うしろめたくいとゞと菊の上見し頼（ゆけ）く

これ（柴方）このおとゞりを。前栽のくろもを給ひ
ありましを。かく吹出て。もとあしのこ萩。を
しなべまちえたる風のかしこまるを。おれ
かへり露もとまりまじうゆさちしすを。すうし（柴ノ）
をしちらうてこ給。おとゞは（源）姫（柴ノ）君のれかへにおは
しますほどに。中（タ）将のきゝまいりなて。朱の口に夏の
こさうじのかこより。つまどのあさゝらひま紙。何
心もなくこいれなへるに。女房（柴ノ）あまたこゑれば。こち（タノ）
とまりて。をとをきでこゝろ。れ屋風もかぎのいたう吹
かれば。をしたゝこゝろをこゝろにこゝとをしあしらは
なり。ひさし（タん柴と只給ふ）のおましにぬなへる人（柴）。もれにまゝぎり

べくもあらず。けたかくきらうに。ざとうちにほふ
こうちして。其のあけぼの。寵のまより。おもしろき
かぎ様の。さきこぼれたるをこそ心ちす。おぢさなく
ミせる。我かほにもうつりくるやうに。あいぎやうは白ひ
たり。まゝなくめづらしき人のれさ面なり。ミすの喰あけ
らるゝを。人ぐとさへて。いかりしたるかりかあらん。
うち(笠)つらひゐへる。いといとじうこゝも。茶(笠)どもをこうろ
ぐるしがりて。えミすてゝいりたまはぬ。おまへなる
人ぐもさ面ぐにもれきこゝげなるすがたどもは。ミ
つたさるれど。めうけるべくもあらぎ。おとぐ(添)のい
とけどもく。たるかにもてなしたまへるも。かゝ

こゝの人こそよそおもしろきはなさをいとゝり
かゝれば心までもしらるゝもやとおぼしてなり
なりとおもふまじきひおそろしくそふらふなり
よしのはるさらうちのはるさしひきあけて
はるかなるゆふべとくるそおもしろくしばし風ちるありさま
ゆうしおもうしてよそのこどもおもしろさおもしろ
まもるそおれとなし法を文らうてこそれば拙穿て
おらぶもほかゝそてぞらそてまちり給ひおやとも
おぼしずいつゝそのうしよる夜めでてそいつしてされ
くちのさかりなり女もねびとくのひおもぬるゝ
なきされさ夜どこもなりそろうる身つしむどうりおぼ

ゆれど、このワ〻、夜の、東のかうしもふさゝるちて、
ふそう所のあしもゝなれば、おそろしきてふちのきぬ、
今まいるやうにうちこはづくりて、すれこのゝ〻ま
あゆゑ出ぬへれば、（源司）されどよあしいなりけんとて、
れつまどれあさゝりけるよと、いまぞことゞめ給
地しばかりことの露なるをけるを、風こそげま
いまほもふきあげつべき地なりかれ、（夕ん）さゝりの心
どもをさはがして、めづらしくうれしきめをみ
つかれとおぼゆ、（源ノ）人ぐまいりて、（人ぐ司）いといかしう
喰ぬべき風に侍る、うしさしのゝよりふき侍れば、
このおまへいのどけさや、むまばのおとぐ、ゑなゑ出

つり髮などは、おやうげにあんとて、地さくことなこ
なひのゝしろ、中将(タ)は(源詞)いづこより抱志つるぞ、三条(タ詞)の
家(大文)に給りつるを、風いたくふきぬべしと、人々のす
つれば、おぼつかなさにあんと乗り給ける、うし(大文)こゝは
まして、心ぼそくかぎの音をも今をかへりて、ひかさ
このやうにをぢ給めれば、うろぐるしさにまうで
給ちんとすゑへば、げに(源詞)をやまうで給ね、おいもて
いさて、まゝひかうちること、世にあるまじきこと
なれど、げにされこそあれなど、哀がり思へなて、
ううさはじげにさんべめるを、このあそん(タ)さふしへぞと、
忠さまへゆづりてなど、此(大文)をうそこ思へ給、地こゝら

すがらいりもうすうかをあれど、うかいしく抽し
ゐふ君(タ)まで、三条の家と、六条院とまゐりて、ゆらん
をられ給ひぬ日あるし、うちのゆ抽いこあるとまゐさしず
ゝもりぬべき日よりほかに、いそがしきおほやけ
ごと、をち気(ゑ)あるどのいとまいるべく、ことしげきま
あえをても、まづこの院(六条)ままいり、こや(大文)よりぞいで給
ひれば、ましてかふかゝる元のかしきまゝよりも、風の
さいぎまあくがれありき給もあられまこも、こや(大文)いと
うれしくこれもしとまちうけおて、こゝ(詞)のよいひ
ま、まづかくさはがしき望かまこそあはざりつれと、
地ぐ(地)いあくきまいあくき給、おほきあるまれえぐ

などのおろしをとも、いとうえてあり。おとぶ（仇敵之）
さしさへのうろまじう吹ちらすよ。うくて（大宮河）もれし
ゆへることくかけいの給。そこらところをかりし。
れいさほひのまづまりて。この君（タ）をこれもしぐる
おぼしたる。つゐなき世なり。いまもおほかたの君し
のうすしぎ給ことはなけれど。閑のおほ（以）いとのこれ
けさひはなかくまうしうたくぞありけるか。中（タム）ね
よもすがらあしき風の音よも。すぐろよ抽衣なり。
心よかけてこひしとおもふ人（雲ゐ）のれことはさしを
かれて。ありつるれ（紫ノ）おもかげのわすられぬを。こは
いかよおぼゆる心ぞ。おろまじきおもひもしそせん。

いとおそろしきことと。こづらせひまぎらり。
ことるまにせひうつれど。ゐ紙ふとおぼしけ。き
しらしすゑありがたうも。抱し給けるかれ。
うれしきひに。いつでひんがしのれ(花ちる)りて。さる抱
のぞまて。こちならび給つらん。女としへなる里
なりや。あれいとおしとおぼゆ。お(源)とどのれ心ざ人を。
ありがたしとせひ志り給。ひとがら(タノ実法之)のいとまめやう
なれば。よげ(笑ノるす)なき紙せひよろねど。さやうならん人を
とそ。おなじうはこてあらしくらさめ。かざりおろん
余の程も。いますうしはうならずのびなんうしと。
せひつぐけらる。あろ(地)きがたに。風すうしきあり。て。

ひら面のやうにつりいづ。六条院にはたちなれたる
やどもこゝかしこれたりなど人ども。風(タム)の吹まふほど。
ひろくそこらこゝろき心ちする院に人ども。たゞおかし
ますおさ(涼)ぐのあたりにこそしげそれ。ひんがし(花ちる)の
まちなどは。人ずくなにおぼされつゝんと。おどろき(タ)
なて。まぐはのぐとすゝに乗り給。こちの程。よそ
さ面あめいとひやくかにふきいる。そらのそしき
もすぐさに。おやしくあくがれたるこゝちして。何
ごとぞや。又ワが心にしひくしくれるよと。おもひ
いづれど。いとにげなきことなり。おなもれぐるおしと。
とさ面うぐ面にしけく。ひんがしのあたり(花ちる)てり。

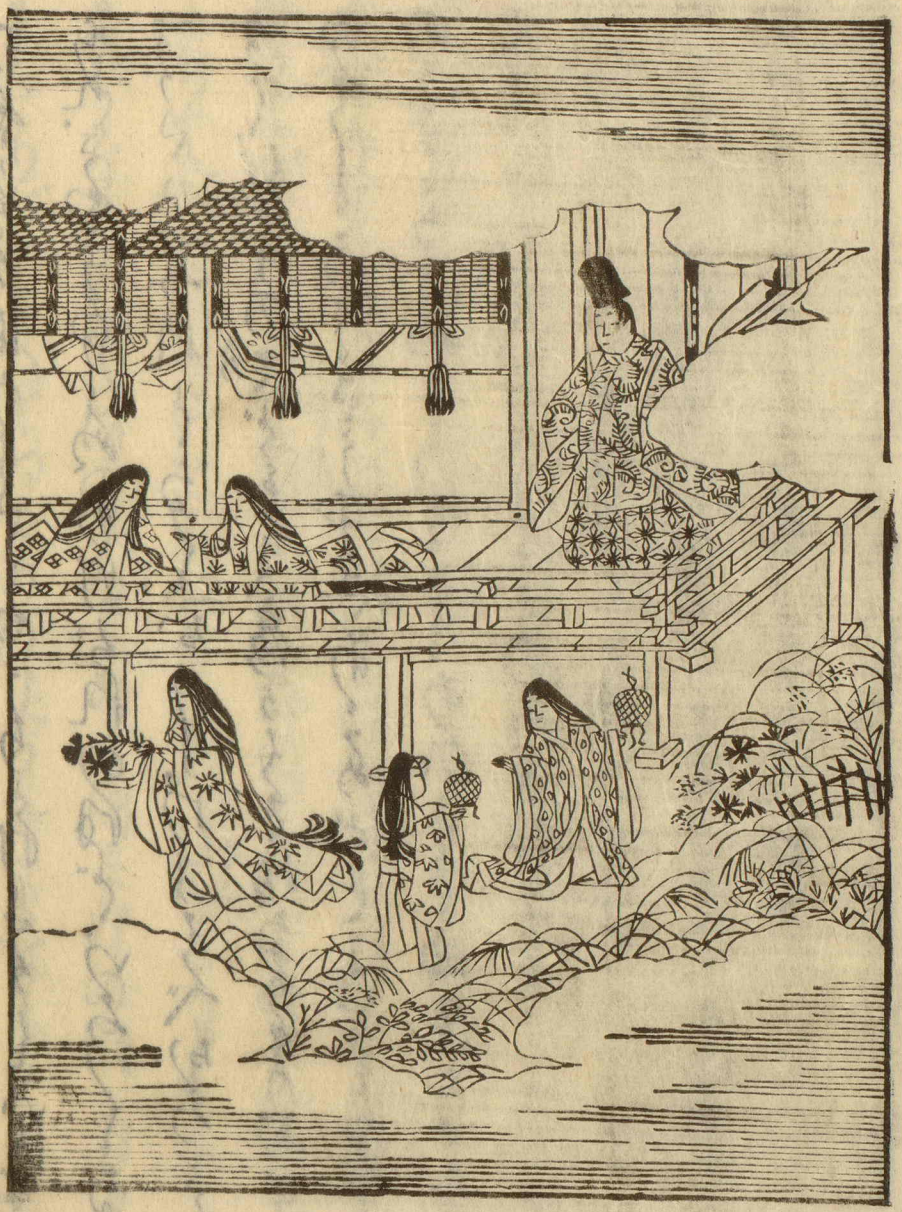
まづちうでぬへれば、とぢごうじてありけるに、とうく
きてしあぐさめて、人めして、所ぐつくろはすべきよ
しあるじいひをきて、ミちまこのおとゞに氣りぬへれど、
まゞこゝうしもまつしずおもしますに、あらわれる
クうらんにをしりつまて、ミつくきば、山のまぢも
ふきちるびりして、えぐどもおほくおれふしたり、草
むらいさらにもいまぐ、ひまぐ、かもら、所ぐのこて
ぢとこ、すいがいあるどやうのまれこぐりがはし、日志
つづくにさし出たるに、うれへがほあるにはのつも、
きらくとして、宅いいとすぐうきるもつくれるに、
そこをかとあく泪のおつるをなしのぐひかくして、

うちしたぶきぬへれば、中ね（タ 源ん詞）のこはげくるまぞあ
ある。夜にまぎふかくらんにとて、おき給ぬり。何ぐす（タん）
まかあらん。きえて給こ思にきで。おとぐうちつらひ（源）
ぬて、いましへぐるしきをなしずなりまし。おろつき（詞）
のけれよ。いまなしひ給いんよ。こころぐるしからん
とて。とぢりかくしひ罪て給けひども。いと（タん）おかし。
女（生）のれいしへにきえしねど。はのぐやうよ。きえて
こそふれ給ことのそのともむこさよ。ゆるびなきれ
なしひれときてねぬへり。見（地）かうしを。れ（源ノ）
づしひきあげぬへば。げぢ（タん）かきかくはしいるさよ。
こちのきてまふしひ給。いかに（源詞）ぞよべ。こや（大文）にまち

よろこび給きや。志(夕詞)りたるきことにつけてを。洞(大声)
もろに抱しめんぞ。いとふびんにこそ侍れと申
こまんにぞ(涙)ひめて。いま(詞)いくばくもなきじ。まめ
やかにつかうまつりこそなれ。うちのおとゞ(は)を。ゑ海
うましもあるまじうこそうれへ給しが。人がら
あやしう。ものやかにおしきうにまうて。おや
などのれけうをもいかしこさるぞ海をばこそく。人にも
をおどろかさんの心あり。海ことにしこそ。ふるき事を
なき人にもなん抱きられけり。さりは心のゑ海おほく。
いとりしこき人の。末の世にあまりまで。ざえこゞひな
くうつさなぐら。人にして。くなん(銀)なきことはかなり

けうなどのあふいとおどろくしかるをけるかぎは
中(秋好)ぎ(タ)はたりぐしさき家づきなどさふらひつらん
やとて、この君(タ)をして、此をうそこそうて給、よりの風の
ととは、いかゞこそうしめしつらん、吹こぶるを給しは、
とこ(風病)りあひ給て、いと無へがたきは、ふめらひ給ふ
程はなんと思ひ給、中(タ)ね(地)ありて、なり此らう此とより
ととりて、知り給、おさぼしけのうち、いとめでたく
おかしげなり、ひ(秋好ノ所殺之)ぐしの墓の、これこのそばなり
うちて、此前のうをこやるをへば、こ(タ)うしふる
まぢうりあげて、ほのうるうあさぼしけの程は、こす
まきあげて人ぞねうりかうらんはもしかりて、

けやかなる限あまたこゝ也。うちとけたるもいかゞあ
らん。さやうなるぬあけぐれのほど。いろ〳〵なる
すがたは。いづれとなくおかし。けしきべかろさせ
ゆて。むしのこどもに。寝かたを語なりけり。たとへん
なぞしこのこさうすきあこめどもに。とこなべし
のかざこなどやうの。とさにあひたる女まで。四五人
ばかりつれて。こくかしこのろさむしなりよりて
いろ〳〵のこどもはまて女よひ。なぞしこなどの。
いとあはれげなるえだどもとりもてまいる。さり
のまよひは。いとえんまぞこゝけり



吹(秋好ノ)くうをひ風は志(しうイ)をまことくにまほふらん。(夕ム)うのうほり
もふれどひまへる(秋好ノ)けひまやとゝいとせやまめでたく。
心げさうをしれて。さちいでまくれど。悪びやうま
うちをとなひて。あゆゑ出まへるま。人ごけざやうま
おどろきがほまはあらねど。こなせべまいまゝ。(地)
まいりのほどなど。(夕ノ)けらはまていりたちなれそそ
まへれば。女房などもいとけうとくはあらず。(地)をうそ
こ。けいをさせまて。(秋好ノ女ごうたち)宰相の君。ないしなどのけをひ
をれば。(夕ノ)けたくしごとも。志のびやうまうたひ給。(ん)これ
をた。さいへど。けたかくすゑたうけをひ首領を
たうまも。(紫ノ方ニ申ケリ)さ聞く地せひいでたう。(紫ノ方地)これ三のおとゞまは。

ミクラしまいりけうして。よべ（嵯ノ）ミすて。ゑくりし
蒸どもの。引来もしらぬやうにて。しほれかしらるを
こなひかり。中（夕）ねこたしまねなて。れ（秋好ノ）へりこそし給。
あらき（夕詞）風をもふきがせぬべくやと。けうくしく
心ぼそくおぼし侍るを。いまなんなぐさこ侍ぬると
笑くなへれば。おや（源詞）しくあえうまおもしすう（秋好）変なり。
女どちは。袖なそろしくおぼしぬべかりけ家。東乃
さ夜なれば。げるをろうなりともおぼいつらんとて。やがて
まいり（源秋好へ）給。れ（源ノ）なをしなぐなるとて。ミすひきあげて
いり給ま。ミじうき（夕ん）れ（嵯ノ事）ひきよきて。たけかり
ミゆるれ袖ぐちはさるこそあらめと皆ふる。むれ

つぶくとなりこちすがもうしてあれば、かり
ざ夜ようやつれ、愛(源比)れりぐうなどうなて、志のびて
中(タ)将(源詞)の朝けのすがたはきよげなりれ、こぐいまは
きびはなりべき程をかくなしりしぎとうゆりも
こころのやうにやあしんとて、ワ(比)がれりかはふりがる
くよしとう給べかるまいといたく心げきうし
なて、宴(源詞)ようしてまつりは、たづしうこそあれ、何
だうりのあしはなり、ゆへくしきもうし給はぬ
人のおくゆしくこころづかひをしれ給ぞうし、いと
なほとうる女しき物かし、そしきづきてぞおもする
やとて出給ふ、中(タ)将なりがめいりて、どうにもおどろく

まじき気色にてゐまへるを心(源ノ)とき人のれめるは
いかゞ云給かん。こゝろかへり。女(雲)ぞ君(源詞)のふのり弱志
まぎれに。中(タ)ねハこゝなりやしかん。かれと(ア)れあきる
ましにうとのまへだ。おもて(雲)こゝろあるめて。いか(詞)
でかさはあらん。ひるどのくるまは。ひとれをとも
せざりし抱をとゝ事ゝ給。私(源詞)あやしとひとりぐちて
ひとりなめ。(地)こすれ(秋好ノ)うちに。いつ(源ノ)と給ぬれど。中(タ)ねひる
どのくさぐちに。人ぐのけしひするによりて抱など
いひこゝろふかれど。おもふこと(雲ゐ又雲ノ事)のすぢくなげし
くて。れいよりもしめりてゐたまへり。こゝろ(源)るより
やがてかにとゝりて。あしのれるをこやるにうまへぐ
(源ん)まんぐしきけしぐつ人などもこゝぐ。なれこゝ

たかぐしきけいしぐろ人などもしぞ。なれこそ
しもづかへどもぞ。くさのなかはまじまてありく
けしきべなどのおしきあらめすぐさうちとけて。
心とぐめ。さりけきうへ給。まんぐうあさがかのきひ
まじわりまをはこれちりしぐれこそをとうひき
むこづぬりなるべし。もれくあそれはおぼえけな
まくは。さうのことをかきまきぐりつ。しちく
ねこまへるは。さきをふこゑのしけれバうちとけ
なへぐめりすぐるは。こうちきひきおとして。けぢめ
しをこういといくし。しのるはけいねなて。風
のさもぎぐりをとうしひなて。つれなくこち

ゆり給も。(略)こころやましげなるを

(略)相ゆるる萩の葉すぐ多かぎの音もうき身

ひとりにしむ心ちして。(比)とひとりごちたり。(玉)ましの

墓には。おそろしとしあり給けるなどなるに。ね

もぐして。いまぞかぐこなどこ給けり。(添詞)ことくし

くさきなをひそとのるまへぞ。ことに音もきで

いり給。(比)屏風などもこれこゝにきて。抽しどけなく

しなしたるに。日の茶やうにさしいでたるほど。けざ

けざと。もれきとげなるさ夜してぬ(玉ノ)ぬへり。(添)ちくね

なて。例の風につけても。おなじすぢに。むつしう

罪しこそ。これぬへぞ。(玉ん)こえずうたてとせて。(詞)うたろ

うなれどこそこゝろひの風にもあくがれる夜ほしく
ゆりつれとむつりこまへば、いとよくうちまゝひ
まて、かぎまつきてあくがれ給ひんや、かろぐし
りしん、さりとゝとまりかるありなんし、やうく
かるれころむけこそせひにこれこゝとりやと
のまへば、げにうちおもひのまゝに、きてしてげる
れとおぼして、こげしもうち忍ミまへる、いと
おしきいろあひつゝきなり、ほうづきなどいふ
めるやうに、ふくらかまて、かゝのかくれるひまぐ、
うけくしう気色、まこのいとあまりけらくなるぞ
いとしもしれこくこしざりける、それほうほつ

なんけくべくもあしぶ。中ねいと云面やうまきうし
給をいかでこのれうちうてしがれと。おもひけるう
うちまて。すゑのまれ寸の手ハうひながし。
志どけるきをやをしひきあげてうゑ。まぎるく抱
どもくさりやすこれば。いとよくこゑ。かくこそふれ
給りしきのしるき紙。おやしのけぎや。おやと写し
ながし。かくふところもなれぶ。まれちく。蔦ハ時ど
けとめとまりぬ。ゑやつけ云面さんとおそろし
うれど。おやしきる心も。おどろきて。れうれば。ちしら
がれますらしうばこゑかへりけるを。ひきよ物
かへるまれぐしのなゑよりて。ちしくとうばれ

くつかろ程女をむつましくくらしとせかへ家
そのさなし。さすがはひとちなかやりなき夜しそ。
うりくりうまへるべし。ともなれくしさてはしぞ
あはれいぞあれうそいひなすまりおもくん。せひら
ぬく夜あくおそらしけつれくろうそ。まくみらう
あれおかしそそ絡ちぬ。もくうれおもひをそひ
さまへるあめり。しべあらりや。おれうとましと
せよ心もなづし。女のれさ夜。げるをしうとうよ
さ。ずるしうちのさそ。ともしずくしあさせりんば。
あずりころあやまちもあざらんとおぼす。明日うし
先れけらひまたげをとりくれど。そうりもすめる

さ面ハふちもなしひぬべくこゝ也。やへ山ぶきれさき
こぶれたるさりは。霧かくれるなどへぞ。かとお
もひいでしるゝ。おりはあらぬよそへなれど。れうち
おぼゆるやうは。それハうぎりこそあれ。そゝけたる
しべなどもうちまじなかし。人のはうちのよきは。
夏こんかたなき柚なりかり。おまへは人もいでこぞ
いとこ面やかはうちさくめきかたしひきてし給ひ。
いかゞあらん。まめぐちてそこちら給。女君
映こぶる風のかしさはをこなべししほれしぬ
べきこうちこそすれ。夕ん見ましくも思ぬは。うちずし
給をほのきゝはにくきもあらおりしなれば。なる紙

こちてまほしかれど・ちらくまなりとこえまうじと
もひて・ふちさらぬ・此(源ノ)かへる
(源)しるつゆにあるびかましかばをこるべしあらき
風にはしほれざらまし・なほ(詞)行をこえまへうし
など・ひ(タノ)がうらにやありかん・きくよくもあらずぞ・
ひ(地)んじの此(花ちる)かへ・これよるぞ・ワ(源ノ)ろり語・字されて
あさくむなうちとけわざにや・もれこちなどする
わびごぶち・おまへにあまたして・ほそびつめく
抽に・ひるひさかけてまさぐかワ人だもあり・いと
こさらなるくちぞのうすもれ・いまやう文のにあく
うちうちなど・ひさちしうまへり・中(源詞)ね(タノ)のしる

がきの。れ（禁中ノ美花ノ事を云り）前のつぼをんざいのえんも。とまりぬら
むかし。かくふきちらしてんまは。ちかりごとか
きられん。すきまじうぐさ杜ちかりちどの給て。
（比）ちかうかあらん。さ雨ぐちかもれいろどもの。いと
きよらなれば。（添ん）かやうちかうかたは。こちまこのうへ（紫）ちも
をうらずかしとおぼせ。れちをしけもんれうを。この
ごろつゝ出しうる並ちて。たゞちかう深かうまへ家。
いとあらまほしき色しうり。（夕）中ぬ（添詞）ことそ。かやう
まてはきせ給いめ。けりさひとれまて。めやすかめり
ちどやうのことを写しまて。けうり給ぬ。むけかしこさ
かたぐ。先ぐり給。れともまありきて。（夕ん）中ぬはち雨

心やましく。うゝまほしき文など日ゝけぬるを忘れて。
姫君の御ゝ文のまゝいりまへり。まぎ（めれと詞）あるゝ（姫君ハ嘆ニと之）なん
おりします。風をとぢさせまて。けさはえおきあがり
給はざりつるとれめれとぞきこゆる。抱（夕詞）さはがし
げなりしかば。とのゐもつゝうまつらんと思まへ
しを。こゝや（大字）のいと心ぐるしうおぼいたりしかば
なん。ひゐなの（ひなの家ノ事ニ）なかの事ハいかゞおりすらんとらひまへぞ。
人ぐにひてあふ（人々詞）ざのかぎぐにまいれば。いうじき
ことにおぼいたるを。ほどくしくこそ吹こゞり
侍りましが。此れとのあつかひにまびまて侍りなど
かたる。ことく（夕詞）しかしぬかこやもんべなれつがれの

すぐ里とこひぬへぞ。人ぞこげしよりて。かみひと
まさ。れすぐ里のふるよとりかろしてこそまつれば。
夕羽 いなこれハかるもしらいてしとのるまへど。さるの
的右上 おとゞの覚しをしふる。すうしなれめなり心ちして
うさ給。地 むしさ紀のうすやうなりなり。すこ心とゞ
めてをしすり。筆のきさうちこつ。こ度やかな
かさやましひぬへるを度いとよし。されどあやしく
こゝまりて。ふくされくちつさこそもれしぬへ
夕 風さちぎむしくもまふ夕まもまする
まなくつましられぬ君。吹こゞりこりかるやまつけ
ぬへれば。人ぞかるのかねも。かみのいろ。りこそ

とくの人ゆりなれときとも。さげ(夕何)りの女もおもひ
つぎりなりや。いづくの野べのほとりの菜よるど。
(比)やうの人ごとまも。ことずくなるまえて。心とくべくこと
もてなさず。いとすくくしくけさかし。まさもかい
まて。むまれ(タノ侍之)をけまさまへれば。おしきつらは。まさ
いとなれたる所ずいぢんなどに。うちさくめきて
とらすなを。つかさひとぐ。ゐぐなるぞゆかしがる。
つ(四石姫)らを給とて。人ごと打そよめき。所平帳ひきなを
しなどす。こつ(タん)の菜のかげだも。しひくべまほしくて。
例は抱ゆかしからぬこちに。おれがちに。つまどの
こすをひきて。本丁のほころびよりこれば。もれ(四石姫)く

そばよりたゞもひけたり始程ぞ。ふとうち見えたる。
人のしげくまゞへばなるのあやめもしらぬ程に。いと
心もとなし。うす気のれぞに。かこのまゝ無けれは
もづれたるす思のひきひろげたるやうにて。いと
ほそくちいさ紀やうぶゐいらうしげにころぐらし。
おらしだりはゞ度さるにもほのこなりしに。
又そよなくおひまさりゐへるなめりかし。ましてさり
いかなるんとおもふ。かれこけるさきぐのさくら山
ぶさといたゞ。これは前の茶とやいふべからんあざ
うさまよりさきさかりて。風にちびさたるにほひは。
かくぞあるかしとおもひよそへらるゝかたゝ人ぞを

心にまかせて。おけられこなしげや。さもありぬべき
程ながらべざてくのけざやかなるこそけらなれ
などもふに。まめ心もあくがるゝ心ちす。なぞ（大文字）文の所
もとに来りゐれば。のどやかに所なこなひし給。
よろしきけり人などハ。うしにもさふらへど。もて
なしけちひさうぞくどもし。さりなるあらりには
まるべくもあらず。かたちよき尼。若こちの。すゝ深（ごら）に
やつれたるぞ。なかくかゝる所につけても。さりかた
にて衰めける。閑（地）のおとゞもまいりゐへるに。おほと
なぶらなど来りて。のどやかに所抱がたり。男も給。娘（雲雨）
若（大文字）を久しくこなしぬが。おきましきことてこゝ

なきまなき給いま（訓詞）此比の程に氣ちきん心（雲ヵ）づくし抽
むきしげまて口おしくおとろへてなん侍ぬる女ご
とそ。よくいまぐもち侍るまじき抽なり名れ。とあるに
つけても。こゝろのこなんつくされ侍けるなど。なる紙
こゝろとけずさひをさゝる氣色にてのこまへぞ心（大文）
うくてきちにも罪ゝ給もず。そのついでにも。いと
ふでうなるむすめまうけ侍て。もてワづらひ侍ぬと。
うれへきそしめてワらひ給こや（大文詞）いであれあやし。
むすめといふ名ハ志て。さゞれうるやうやあると
のこまへバ。それ（訓詞）なんこゞうしきことになんまゝべれ。
いぞ。ゆらんぞきせんと。（地）きそし給とや

69038
6AP78